

## 第6回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

- ◇実施日時 2023年9月26日(火) 19時~21時30分
- ◇方法 ZOOMによるオンライン開催
- ◇参加者数 28名
- ◇内容 単元構想案の相互検討②

【ルーム1】ファシリテーター：大西浩明（奈良教育大学）

### 1) 原田龍ノ助先生（奈良市立朱雀小学校）

#### 小学校3年 社会科「おそろしい火事からくらしを守ろう」

消防署の見学を中心に、なんとか火事について自分事化できる学びにしたい

「火事が起きたときにだれがわたしたちを守ってくれているのだろうか？」

→ 様々な人たち、機関が協力していることを自分たちで調べる

どのようにして守ってくれているのだろうか？ → 消防署の見学

他の人に守ってもらって当たり前ではない！ 自分でできることは何か考えさせたい

火事が他人事になっているところから、いかに自分事にさせればいいのか

#### 意見交流から

- ・今の子どもは「火を見る」経験が少ない。まずは火を見る必要があるのではないか。映像ではなく、生の火を見せることから導入にしていけばいいのでは。
- ・最初にアンケートをとってみればどうだろうか。火事を防ぐために家でどんなことをしているか、子どもと保護者に聞いてみることで切実な課題意識が生まれるのでは。
- ・消防団の人たちの方が、地域に密着して日常的に活動されているので登場してもらってもいい。
- ・朱雀地区には女性防災クラブがあって、紙芝居などもやっておられるようなのでつながってみては。
- ・消防署の見学では、事前にどのような課題意識を持っていくのかが大事。
- ・「火災報知器が鳴って本当に逃げるのか」 火災報知器鳴らしてみる？  
自分の中にある「正常化のバイアス」を見つめられると自分事化できるのでは。

### 2) 森岡美咲先生（奈良市立三碓小学校）

#### 小学校5年 総合的な学習の時間「わたしたちの町の生物を守ろう」

富雄川の生き物を見に行く（生物図鑑を持って） 絶滅して今はいない生き物もいる

かつては富雄川にもいたペタキン（ニッポンバラタナゴ）

近畿大学の先生や学生さんに協力してもらって、ペタキンを飼育する体験 ペタキンの観察

「ペタキンは、なぜ富雄川から姿を消してしまったのだろうか？」

→ 水田や池の環境の変化、水質汚濁 共生関係にあるタガイやヨシノボリはいる

ペタキンが単に残ったらいいいというのではなく、その生物と関係のある生物や生育環境を守る、取り戻すことが大事

#### 意見交流から

- ・飼育しているのだから、「こんなにきれいな魚がいなくなるのは・・・」という思いを持たせたい
- ・富雄川はきれい？ → 過去はきれいだったが今はそうではない。子どもにはいいイメージがない。

- ・水質調査なども取り入れてみては。  
学校の中でこの取組を継続させていくためにも、水質改善に長期的なスパンで考える方向でいいのではないか。
- ・ペタキンが生き続けられる環境とは？  
→ 共生関係にあるタガイが少なくなったりなど、数のバランスが崩れると生きられない。
- ・昔ペタキンがいたころの富雄川はどんな様子だったのかを知る場面が必要ではないか。
- ・共生関係もそうだが、「いろいろな生き物がいることが豊かなこと」というゴールに。  
「いろいろな生き物がいる富雄川にするには？」という最後の問いがよいのでは。
- ・奈良市内にも同じように飼育している学校もあるので交流してはどうか。

### 3) 山崎佳那子先生（大津市立仰木の里小学校）

#### 小学校1年 生活科「たのしい あき いっぱい」

校内にある「みのりの森」で、「あきをさがそう」

拾った葉っぱや木の実で遊ぼう おもちゃランドをつくって遊ぼう みんなを招待しよう

E S Dの観点で考えると、最後に「これからもみのりの森で楽しく遊ぶためには、どんなことができるかな？」と考えさせたいが、ここにどうつなげていけばいいか

#### 意見交流から

- ・4年生が総合でみのりの森を改善しようとしていたり、E S Dクラブがいろいろやろうとしていたりするのでコラボしたらよいのでは。  
→ 成安成形大学が近くにあるので、学生と遊具を作ろうという計画もある。
- ・森林インストラクターがおられると思うので、つながるといろいろな遊びも教えてくれる。  
いろんな遊びができると、この森が「お気に入りの場所」になる。
- ・「お面をつくる」だけでも、いろいろな葉っぱや木の実を使って、子どもなりの発想で広がりのある学びが展開できると思う。
- ・2年生や4年生ともつながって、いっしょに活動できることも結構あると思う。
- ・森の中で寝転がったりすると楽しそう。まずは森でとにかく思い切り遊ばせること。
- ・1年生の生活科なので、最終的にみのりの森が「好きな場所」「大切な場所」になれば十分ではないか。  
もっとこうしてほしいことを、4年生やE S Dクラブに伝えるだけでも発信になる。

### 4) 臼井達也さん（NPO 法人わかやま環境ネットワーク）

#### 高校1年 総合的な探究の時間「地域の空き家について考えよう」（箕島高校）

和歌山県の空き家率は全国ワースト第2位

空き家になっている背景や問題点などについて知り、未来に向けてどうすればいいか考えさせたい

「まちの空き家には、どんな特徴があって、どんな歴史があるのだろうか？」

→ 自分たちにできることは？ お金がかかる 地域に発信して

空き家の利用にはどんな方法があるだろうか？

市役所の方にも入ってもらっていて、行政への提案はできると思う（すでに抱えている家もある）

地域に就職する生徒が多く、地域への愛着や関心を深められたら

#### 意見交流から

- ・橿原市今井町の伝統的な地区も多くの空き家が問題になっている。外部から来た人が古民家カフェな

どをしたりしているが、埋まっていないのが現状。

断熱が弱く住みづらいということも、空き家になってしまう要因にある。

- ・過疎化、高齢化など他の社会課題とともに考えていかないといけないのではないかな。
- ・高校で「空き地」について学習した。自分だったらこの土地で何がしたいか考えたりした。空き家も、将来自分が大人になったときにどんな家に住みたいか、リノベーションを含め考えたりできるのではないかな。
- ・何か行動すれば一石二鳥でことが進むのがESDではないかと思う。たとえば、課題と課題をつなげる。空き家問題と高齢化問題をくっつけて考えてみるとよいのでは。

【ルーム2】ファシリテーター：加藤久雄（奈良教育大学）

- 1) 土屋岳先生（山形県立高畠高等学校）
- 2) 小谷隆男先生（奈良教育大学附属小学校）
- 3) 坂本交司先生（奈良教育大学附属中学校）

記録はありません

【ルーム3】ファシリテーター：圓山裕史（奈良市立伏見小学校）

- 1) 太田馨先生（山形県山辺町立山辺小学校） 小学校2年 生活科「山辺町を好きになろう」

山辺町の魅力→豊かな自然、ニット（日本代表の公式セーターにも）、ワレモコウ、リンドウ

まずは、校区の地図作りでどんな店やスポットがあるかを子どもたちから出させ、その後に町探検に行くことで、どんなところを深掘りしていきたいかを考えさせていく

2回目の町探検では、自分が決めたところにインタビューをしに行き、町の人との出会いや対話から、自分たちの町の良さを感じることで、山辺町が好きだと思えるような流れにしたい

その後、自分たちの気づきを1年生に発信することで、学習したことのアウトプットを行う予定  
小学校2年生という学齢で

- ・ESDとして成り立つかどうか。素地を育むという感覚でいいのだろうか。
- ・「行動化」としてどんなことができるだろうか。

#### 意見交流から

- ・ESDとして目に見えるような成果や行動化は、難しいと思うので、思っておられるように素地を育むというくらいの気持ちでいいと思う。
- ・発信はなぜ1年生相手なのか。学校内での流れとしてそうなっているのか。
  - あまり深くは考えていなかった。流れもあるし、大人はわかっているだろうから、何も知らない1年生に伝えるのがいいかと思った。
  - 大人は本当にわかっているだろうか。地域の大人に向けて発信することで、大人も知らなかったこと、気づいていなかったこともあるかもしれない。1年生も2年生の発表を聞いて、何かしらの学習意欲や生活に変化はもたらされるだろうか。
- ・町の人とお話をしようというのはいいと思う。そこで人に出会い、話を聞くことで、工夫や努力に気づき、自分たちの生活とのつながりを見つけることができるのではないかな。それは目標としている相互性や連携性につながると思う。そして、親を含めた大人に向けて発信すれば、買い物をする場所など生活の中に変化が生まれることもあるだろう。
- ・インタビューをするときに、「山辺町は好きですか。」というような質問を必ず入れるとか、聞いた内

容をお互いに聞きあって、共通点をさがしてみるのもいいのではないか。

## 2) 入澤佳菜先生（奈良教育大学附属小学校） 小学校1年 生活科「おうちのひとのしごと」

家事労働の中で「洗濯」を取り上げて、その工夫や家庭によつての共通点や相違点にきづいていくようなことが目標

お手伝いをさせることが目標ではなく、家の人と一緒に洗濯をしたり、話を聞いたりすることで、洗濯は洗濯機が勝手にやっているのではなく、家の人と考えて洗剤を選んだり、使い分けたりして行っていることであることを感じさせたい

保護者にゲストティーチャーにも来てもらって話を聞く活動を取り入れる

ESDとしては明確な行動化は難しいと思うので、ESDの素地を育むような学習として位置付ける  
意見交流から

- ・ ESDの価値観は「幸福感」でいいのではないか。当たり前洗濯されていた服も家の人がいろいろなことを考えて、工夫して洗濯してもらっているということに幸福感を感じるはずだ。
- ・ 貢献できるSDGsは、「健康」ではないか。また、「洗濯しているのはお母さんばかりだ」みたいなことがあれば、「ジェンダー」にもつながるかもしれない。
- ・ 「洗濯は洗濯機がする」ということにクリティカル・シンキングも働くのではないか。
- ・ 保護者にインタビューではなく、ゲストティーチャーなのがいいと思う。母親の立場で話をしたいと思うし、聞いてほしいとも思う。
- ・ 身近な暮らしの中から「洗濯」というテーマで、ESDとして低学年にでも取り組みそうな内容で、すごく面白いと思う。

## 3) 三上凜矩先生（山形市立第三中学校） 中学〇年 総合×音楽 「花笠音頭」

花笠音頭は、労働者が作業時に歌っていたものがもとになっているが、現代の花笠まつりで歌われているものは、祭りのために歌詞を公募したり伴奏をつけたりしたもので、元の原型は伝わっていない校区に近いところで行われる花笠音頭について、自分たちで調べたり、大学のサークルの人たちとも連携して教えてもらったりすることで、花笠まつりが行われている地元の子どもたちが愛着を持てるようにしたい

他の地域で伝わっている民謡との対比し、その共通点や相違点などにも気づかせたい。

悩んでいること

- ・ 導入での工夫。
- ・ 音楽科としてのESDが成立しているか。

意見交流から

- ・ 小学生時代に表現運動などで経験しているのか。また、山形では花笠音頭を学校や地域で活動しているような実態があるのか。
  - そこは未調査だったので、実践するときには調査して、実態に合わせる必要がある。
  - 学校や地域によっては行っているところはあるが、現任校では行われていない。
  - 発信・行動化として小学生に伝えるというのもいいのではないか。
- ・ 導入で原型の花笠音頭を聞かせて、「これは何の民謡なのか」という問いかけをしてみてはどうか。今のものとは違うということで、生徒も聞いたことがないものであろうから、なんで今のものと違うのかと調べるきっかけになっていくのではないか。

- ・音楽科としてESDの授業づくりをするときには、やはり音楽科としての表現や活動を入れて評価できる方がいい。歌詞に注目すると当時の人たちの思いに触れることができることもある。(例として「茶摘み」など)
  - 歌詞を現代風にリメイクしていくのもおもしろいかも。奈良でも万葉集を「超訳」といって、現代風にリメイクした取り組みも過去にあった。
- ・運動会でソーラン節を踊るが、あれもニシン漁の漁師さんたちの歌であるし、つらい作業の時に音楽の力で乗り越えようとして生まれたものは他の地域にもあるだろう。
- ・今年、自分の小さな子どもを連れて花笠まつりに参加したが、一般参加のところで楽しそうに参加していた。そういうところに参加する、もしくは参加してみようと思える生徒になれば、実践としても価値観の変容がみられるということになるのではないか。

#### 4) 堀川孝子先生(奈良教育大学附属中学校)

##### 中学校3年 英語×総合 「奈良を発見 お土産 Brush up プロジェクト」

奈良の魅力を発見・発信するために「お土産」に視点を置いて考えた  
心に残るお土産とはどんなものか。

ハッピーな体験、作り手の思いに触れるようなものではないかといったことをテーマにお土産を Brush up させて、最終的には企業とのコラボ商品なんかが開発できればいいなと思っている  
調査として英語で外国人にどんなお土産を買ったのかをインタビューし、それをグループごとに報告していくと、「大仏」「シカ」といったお土産ばかりになっていて、心に残るようなお土産になっていないのではないか。そういったところからお土産の Brush up の必要性を感じさせたい

「奈良ならではのカタチに」をコンセプトに、プレゼンを考え、そういったものを企業に向けて発信できたらいいなと思っている。

##### 意見交流から

- ・「心に残るお土産とは」を考えるときに、自分たちの経験をもとに話し合せてはどうか。「なんとなく」や「どこどこに行ったから」ではなく、「こんな思い出があって、このキーホルダーを買った」のようにエピソードが話せるというのが、「心に残るお土産」なのではないか。例えば外国人の人がシカのキーホルダーを買っていて、なぜそれを買ったのかインタビューしたときに、「シカに噛まれた思い出があるからだよ。HAHAHA」とか「シカがとてもかわいかったから」みたいなものは、「心に残るお土産」だったのだと考えられますね。
- ・「奈良ならではのカタチに」でプレゼンを企業に向けてするのもいいが、「こういうところに行くと、こんな体験ができますよ。」と外国人観光客におすすしに行くという活動も英語を使う必要性があっているのではないか。そういったアウトプットをするためには、奈良の良さをしっかりとインプットしなければならないので、調べる必要性が増すのではないか。
- ・大学でそういったことを考えているところもあるのではないか。そういうところと連携するのもいいのではないか。
- ・お土産の商品開発はハードルが高いが、英語パッケージのデザインなども企業に提案するものとしてはいいのではないか。
- ・この「心に残るお土産」、「ハッピーな体験」といったワードがワクワク感があって、すてきだと思う。